

家政学部 健康栄養学科 小論文問題

次の文章は、毎日新聞に掲載された文章です。この文章を読んで、あなたの意見を800字以内で述べなさい。

火槍

クマを撃つ後ろめたさ

専門編集委員 大治 智子

宮沢賢治の故郷である岩手県花巻市を訪ねた。

市内を流れて北上川に合流する豊沢川の上流。その山奥にある通称「なめとこ山」は、賢治の童話「なめとこ山の熊」に登場する。

マタギ（猟師）の小十郎とクマの物語だ。

小十郎は畑を持たない。やむをえず猟師をしている。クマを撃っては、「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ」（新潮文庫「注文の多い料理店」より）とつぶやく。「てめえも熊に生まれたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生まれなよ」（同）と弔うように言う。

小十郎は生活に必要な程度しか殺さないし、クマもむやみに小十郎を襲うことはない。描かれているのは、両者が織りなす共生の物語のようだ。

地元の伝承によれば、狩りには危険が伴うことからマタギは山に入る前に「山の神」に祈った。必要以上の狩りはしないという「戒律」を守る。そうやって貴重なクマを子孫に残そうとしてきた。

近代医学が普及する前、動物の肉や骨、胆のうなどは病をいやす大事な「薬」だった。クマの胆のうを乾燥させた「熊胆^{ゆうたん}」は特に貴重で、解熱や鎮痛に用いられた。クマの脂もやけどや切り傷に効くと信じられていた。マタギは地元の名湯「鉛温泉」に湯治客用のクマの胆^いなどを卸していたとされる。

「なめとこ山の熊」にも「腹の痛いのに利けば傷もおる。鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔からの看板もかかっている」（同）と記されている。

東北地方のツキノワグマが絶滅せず生き延びてきた背景には、小十郎にもうかがえる「クマ殺し」への一抹の後ろめたさと、いったん奪った命にも畏敬^{いけい}の念を抱くつつましさがあったように思える。

環境省が発表した全国のクマによる今年4～10月の人的被害（けがを含む）は計197人。岩手の被害は秋田に次いで多い。駆除されたクマの数も近年にないペースで急増している。

人を襲うクマを殺すことは、現状ではやむをえない。しかし人とクマの共生の物語は過去の遺物ではないだろう。

里山の荒廃、コロナ禍などで広がったキャンプブームなどに伴う生活ゴミの不始末——。人間の生活圏にクマを追い立てた理由のいくつかは、人間社会そのものに起因している。

クマを殺すことへの「後ろめたさ」を忘れることなく、根本的な対策を急ぎたい。

2025年11月25日 毎日新聞朝刊